

他者の考えを受け止めようとする児童の育成

-葛藤について議論し、自他のよき心を自覚する道徳科の実践を通して-

名古屋地区 名古屋市立瀬古小学校 駒田 麻子

1 研究のねらい

私が考える「他者の考えを受け止めようとする児童」とは、固定概念にとらわれず、相手の考えを深く理解し、様々な考え方を受け止めようとする児童のことである。例えば、「相手の言動を見ておかしいと思ったけれど、その人なりの理由や思い、よさがあるのかもしれない」と考えられる児童のことである。このような児童は、今後の人生において、人の考えは多様であるという考えのもと、よりよい人間関係を築くことができるようになると思う。

筑波大学附属小学校教諭加藤宣行氏は「良心、性善に立つ、よりよく生きる気持ちのことをよき心」としている。そして、「人は誰しもがよき心があることを前提に、このよき心を引き出し、自覚させ育てていくために授業をする」と言っている。さらに、議論を通してよき心に迫っていき、物事をより豊かに受け止める気持ちを高めていくことができるようにしている。私は、目に見える人の言動は氷山の一角であり、目には見えないが、人の言動を支える考え方は様々あり、さらに、その根底によき心があると思う。

本学級の児童は、自分の感情を素直に表現するよさがある一方で、自分が考える「普通」に当てはまらない他者を否定的に見たり、相手の言動にすぐに感情的になりトラブルになったりすることがある。これらは、相手の言動を表面的に受け止め、根底にある自他のよき心に気付いていないことが原因だと考える。私は、道徳科の授業で、よき心に迫り、自他のよき心を自覚することで、物事をより豊かに受け止める気持ちが高まり、他者の考えを受け止めようとする児童が育つと思う。

そこで本研究では、三つのステップで目指す児童を育てる。まず、道徳的価値に対する自分の考えに疑問を抱く。次に、議論を通してよき心に迫る。最後に、議論を通して見つけたよき心を自覚し、そのよさを実感する。このような授業を積み重ねることで、様々な考え方を受け止めようとする児童を育てたい。

①道徳的価値に対する自分の考えに疑問を抱く

②議論を通してよき心に迫る

③議論を通して見つけたよき心を自覚し、そのよさを実感する

他者の考えを受け止めようとする児童

【資料1 研究構想図】

2 研究の方法

(1) 目指す児童像

固定概念にとらわれず、相手の考えを深く理解し、様々な考え方を受け止めようとする児童のことである。

(2) 研究の仮説

道徳的価値に対する自分の考えを引き出した後、その考えだけでは説明できない場面を提示することで、児童が道徳的価値に対する自分の考えに疑問を抱くようにする。次に、議論を通してよき心に迫る。最後に、議論を通して見つけたよき心を自覚しそのよさを実感する。この実践の積み重ねが、他者の考えを受け止めようとする児童の育成につながるであろう。

(3) 研究の手だて

三つのステップで目指す児童を育てる。まず、道徳的価値に対する自分の考えに疑問を抱く。次に、議論を通してよき心に迫る。最後に、議論を通して見つけたよき心のよさを実感することができるようにする。

ア 道徳的価値に対する自分の考えに疑問を抱く

まず、「親切とは〇〇」「友達とは〇〇」など、現在の道徳的価値に対する考えを引き出し、道徳的価値に対して「普通は〇〇」と考えていたことを認識できるようにする。次に、これまでの考えだけでは説明できない場面を提示する。そうすることで、児童が「自分がもっている考えは本当に正しいのか」「ある場合はよいが、この場合は当てはまるだろうか」といった、道徳的価値に対する自分の考えに疑問を抱くことができるようにする。

イ 議論を通してよき心に迫る

まず、中心発問として、登場人物が行動に至るまでの心情の変化や揺れを考えることができる発問をする。そうすることで、「正直に話した方がいいと分かっているけど、友達に嫌われたくない」「ルールを守らなくてはいけないけど、ついやぶりたくなってしまう」など、「〇〇だけど●●」といった言動の奥にある葛藤に気付くことができるようにする。

次に、登場人物とは異なる行動を提示し、登場人物の行動を問い直す発問をする。そうすることで、「提示された行動はなんか違う」と感じる理由を考え始め、考えのよりどころとなるよき心に気付くことができるようにする。

ウ 議論を通して見つけたよき心を自覚し、そのよさを実感する

まず、議論を通して見つけたよき心を「学んだ心」とし、文章表現と合わせて、色、イラスト、形など自分に合った方法でも表現してよいこととする。そうすることで、誰もがよき心を自覚することができるようにする。次に、「学んだ心」は「自分にとってどんなよさがあるか」「相手にとってどんなよさがあるか」「みんなにとってどんなよさがあるか」という価値を高める発問をする。そうすることで、自分が学んだよき心のよさを実感することができるようにする。

3 授業実践1【主題名 生活を見直す（A節度、節制）】

(1) 教材について

ア 教材名

「なれなかったリレーの選手」（出典：道徳6 きみがいちばんひかるとき 光村図書）

イ 本時のねらい

ゲームのしすぎで寝不足が続き、リレーの選手になれなかった「ぼく」の姿などを通して、後悔しないよう日頃から大切にすべきことを考え、節度ある生活を送ろうとする心情を育てる。

(2) 実践の様子

ア 道徳的価値に対する自分の考えに疑問を抱く

T：自分をコントロールできる人ってどんな人だろう？
C：切り替えが早い人。 C：感情のままに動かない人。 C：我慢できる人。
T：明日、絶対に勝ちたい小学校生活最後の運動会があります。Aさんは、ゲームや動画を1分も見ないで、9時に寝ました。Bさんは、30分だけ決めて、9時半に寝ました。どちらの方が自分をコントロールできているでしょう？
C：Aさんの方がコントロールできていると思う。だって、1分も見えていないもん。
C：Bさん。30分だけ決めて、自分で決めているから。
C：Aさんも自分で決めているよ。 C：Bさんの場合は、「後もうちょっと」って、なりそう。
C：じゃあ、やっぱりAさんの方がコントロールできているんじゃない？最初から見なければいいよ。
C：そうかもしれないけど、Bさんの方が気持ちは満たされるよ。
T：さっきみんなは、「自分をコントロールできる人は、我慢できる人って言っていたから、1分も見ないAさんの方が、よりコントロールできているのではないかな？
C：①うーん。そうかもしれないけど、気持ちが満たされない…。
C：②どっちも自分で決めているから、どっちもコントロールできているよ。

波線①のように、「我慢はAさんの方ができている気がする。けれど、ゲームをしたい気持ちは満たされていないから自分をコントロールするってどういうことだろう…」と、疑問をもつ様子が見られた。また、波線②のように、「自分で決めたことを自分でちゃんと守っているからどっちもコントロールできている」と、その時の状況や気持ちによって変わってくることに気付く児童もいた。

イ 議論を通してよき心に迫る

登場人物が行動に至るまでの心情の変化や揺れを考えることができる発問

T：30分だけと決めてゲームを始めてから、夜中の1時を過ぎるまで、ぼくはどんな気持ちでゲームをしていたのだろう？

C：最初は楽しいと思っていた。後1回だけ、後1回だけって思って続けた。

C：毎年リレーの選手になっているから、油断した気持ちもあった。

C：①だんだん時間を忘れていった。ゲームに夢中な気持ちがどんどん強くなっていった。

C：②私もやめなきゃって分かっているけど、スマホを使い始めると、後ちょっとって続けちゃう。

波線①②のように、自分の経験と重ね合わせながら、「人はだめだと分かっているけど、一度夢中になるとやめられなくなる」といった言動の奥にある葛藤に気付くことができた。

登場人物とは異なる行動を提示し、登場人物の行動を問い直す発問

T：我慢をして、最初からゲームを始めなければよかったのではないだろうか？

C：③確かにやらなかった方がよいと思う。

C：④やっぱり自分で決めれば、自分で守ることができると思う。

C：⑤この子は、やめられなくなる人だからだめ。やめられる人はやってもいい。

C：⑥絶対にやめるっていう強い心があれば大丈夫。

C：⑦全部我慢すると好きなことができない。今やっていることの大切さと明日やることの大切さを比べるとよいと思う。

波線⑦のように、「自分にとって大切なことを大切にしていきたい」という、よき心に迫ることができた。一方で、波線③のように、提示された登場人物とは異なる行動に「なんか違う」と考え始めることなく、すぐに納得してしまう児童がいた。今回提示した「ゲームがやめられなくなるのであれば、最初からゲームをやらない」という行動は、「ゲームがやめられない」という問題を解決できてしまう行動であったため、「なんか違う」と感じることはできなかったためだと考える。また、波線④⑤⑥のように人間の弱さを捉えられず、葛藤について十分に考えることができない児童もいた。

ウ 議論を通して見つけたよき心を自覚し、そのよさを実感する

誰もが自分の学びを自覚する

T：どういう心があると、自分をコントロールできるのでしょうか？

C：①未来の大切さを考えると自分をコントロールできる。

C：②今の好きなことと、明日の大事なことを比べると、自分の好きなことより、自分にとって大事なことを優先することが大切だと思った。

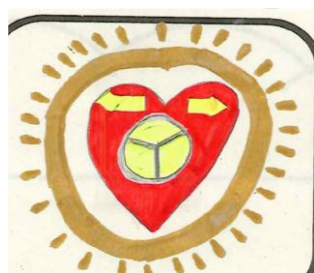
C：③絶対っていう強い心があればコントロールできる。

C：④早寝早起きが大事。

C：⑤ゲームを少しずつやめればコントロールできる。

いつも自分が楽しいことをしているとき、ちゃんと決めたことを守れているのか、もしくは守れていないのかをよく考え、自分がコントロールできる所で条件を考える

【資料2 A児の学んだ心】



【資料3 B児の学んだ心】

自分でどっちにするかコントロールする。この気持ちが心の真ん中にある。周りには、ついつい自分が流されちゃうことがあるから、流されないように、周りを壁で守るイメージだよ。

よき心を自覚する

A児、B児のように、節度、節制における人間の弱さを捉えた上で、自分で自分を律することの大切さを自覚することができた。さらに、波線①②のように、「自分にとって大切なことを大切にしていきたい」という節度、節制を支える考えのよりどころとなるよき心について自覚することができた。

一方で波線③のように、節度、節制における人間の弱さを捉えられず、葛藤について十分に考えることができなかつたり、波線④⑤のように、本教材の中だけで限定された節度、節制について表現したりする児童もいた。

自分が学んだよき心のよさを実感する

自分が学んだよき心は「自分にとってどんなよさがあるか」「相手にとってどんなよさがあるか」「みんなにとってどんなよさがあるか」という価値を高める発問をした。すると、「自分にとって大事な事がうまくいく」「相手を困らせたり迷惑をかけたりすることがなくなる」「みんなが自分にとって大事なことを大事にできると、みんな気分がよくて平和だと思う」などと記述した。児童は、自分が学んだ心を一人一人の考えとして終わらせるのではなく、自分や他者、集団との関わりの中で捉え直すことで、そのよさを実感することができた。

(3) 成果と課題（成果○）（課題●）

- 議論を通して見つけたよき心を自覚し、そのよさを実感する活動については、文章表現と合わせて、自分に合った方法で表現することで、誰もが節度、節制に対する様々な考えやよりどころとなるよき心について自覚することができた。
- 価値を高める発問によって、自分が見つけた節度、節制に対する考えが自分だけでなく、相手や集団にもよい影響を与えることに気付き、よさを実感することができた。
- 道徳的価値に対する自分の考えに疑問を抱く活動については、AさんとBさんの行動の比較に留まったため、児童が元々もっていた「節度、節制とは我慢できる人である」という考えだけでは説明できない状態を十分につくることができず、自分の考えに疑問を抱くことができない児童もいた。今後は、行動ではなく心情を比較することで自分の考えでは説明できない状態をつくり、疑問を抱くことができるようにしたい。
- 議論を通してよき心に迫る活動については、登場人物とは異なる行動を提示し、登場人物の行動を問い直す際、よき心に迫ることができない児童もいた。これは、提示した「最初からゲームをしない」という行動が、登場人物が抱えていた葛藤を解決できてしまう行動であったため、「なんか違う」と考え始めることができなかった児童がいたからだと考える。今後は、登場人物とは異なる行動を提示する際、児童が「なんか違う」と考えることができるように発問を工夫したい。

4 授業実践2【主題名 友達とは（B 友情、信頼）】

(1) 教材について

ア 教材名

「コスモスの花」（出典：道徳6 きみがいちばんひかるとき 光村図書）

イ 本時のねらい

みんなから称賛される北山を快く思えないまま、彼に対するクラスメイトの意地悪な声を思わず止める「ぼく」の姿などを通して、友達とはどんな存在なのかを考え、互いのよさを認め合い、互いに信頼し合える友情を大切にしようとする心情を育てる。

(2) 実践の様子

ア 道徳的価値に対する自分の考えに疑問を抱く

T：よい友達関係ってどんな関係？
C：約束守る。 C：悩み事が相談できる。 C：協力し合える。
T：よい友達関係の友達といるとどんな気持ちになる？
C：安心。 C：穏やか。 C：楽しい。 C：落ち着く。
T：AさんとBさんは仲良しです。Aさんが、テストで、クラスで一人だけ100点を取りました。Aさんは、クラスのみんなから大注目され、ほめられています。それを見たBさんは、どんな気持ちになるかな？
C：うらやましい。 C：悔しい。 C：ショック。 C：やきもち。
T：AさんとBさんは、よい友達関係と言える？
C：いや、うーん…。
C：けんかするほど仲がいいとは言うよ。ライバルならよい関係だと思う。
T：みんなはさっき、よい友達関係の友達と一緒にいると、「楽しいとか安心する」と言っていたね。Bさんは、うらやましいとか悔しい気持ちになっているから、よい友達関係とは言えないのではないかな？
C：①うーん、そうだけど…。
C：②分からない。

波線①②のように、「よい友達関係の友達といると、楽しいとか安心した気持ちになる」というこれまでの考えでは説明しきれないことに気づき、友情、信頼について疑問を抱いている様子があった。

イ 議論を通してよき心に迫る

登場人物が行動に至るまでの心情の変化や揺れを考えることができる発問

T：「北山なんてー」や思わず「おい、やめろよー」と言った時、ぼくはどんな気持ちだったでしょう？
C：「北山なんてー」の時は、くやしい。 C：嫉妬。 C：イライラ。
C：「おい、やめろよー」の時は、さすがにボールをぶつけるのは、やりすぎっていう気持ち。
C：①頭ではうらやましいと思っけていても、心の奥では大切な人を守りたいという思いがあった。
C：②友達だと思っけているからこそ、色々な気持ちになるのだと思う。

「北山なんて」という思う気持ちから「やめろよ」と言うまでの心情を考えたことで、波線①②のように、「うらやましいけれど守りたい」「友達だからこそ様々な気持ちになる」など、言動の奥にある葛藤について考えることができた。

登場人物とは異なる行動を提示し、登場人物の行動を問い直す発問

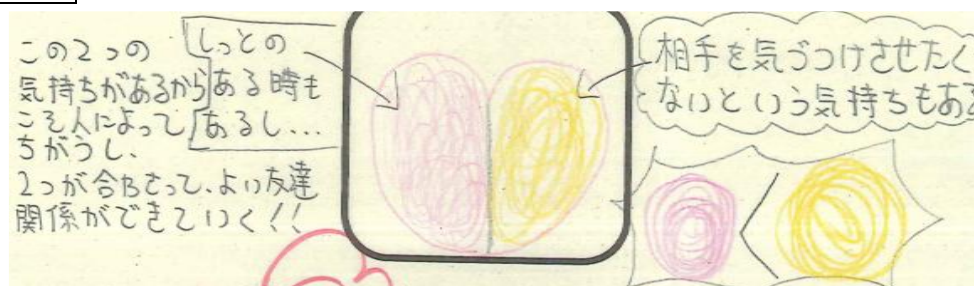
T：北山に対する悪口が聞こえてきた時、ひとまずは、だまっけていてもよかったのではないかな？
C：③嫉妬しているけど、北山が悲しい気持ちになるのはいやだ。
C：④本当は大切な友達。
C：⑤心では、守りたいっていう気持ちだし、よい友達でいたいっていう気持ち。
C：⑥友情があった。今までの助け合いがあった。だから、「やめろよー」って言った。

「だまっけて見ているのはなんか違う」と感じる理由を考えたことで、児童は表面的な言動だけでなく、その言動を支えるよき心である思いや願いについて迫ることができた。そして、波線④～⑥のように、「本当は大切な友達だから」「今までの友情があったから」など、ぼくの言動のよりどころとなるよき心について発言した。今まで自分も北山を快く思っけていなかったにも関わらず、思っけて止めるという言動に至ったよりどころとなるよき心について考えることができた。

一方で波線①のように、よき心について考えることができていた児童にとっては、「だまっけていてもよかったのではないかな？」と発問されても、「心では大切な人を守りたいと思っけているからだよ」と、再び同じことを問われている状況になっていた。この児童は、終末の学んだ心では「友達は大切にしないといけなない」と記述し、展開で迫ったよき心を十分に表現できなかった。

ウ 議論を通して見つけたよき心を自覚し、そのよさを実感する

よき心を自覚する



【資料4 C児の学んだ心】

C児のように、友達だからこそ様々な気持ちになること、悔しい気持ちがあっても、友達を大切に思う気持ちもあると、友情、信頼における様々な考えや考えのよりどころとなるよき心について表現することができた。

自分が学んだよき心のよさを実感する

「自分が学んだよき心は、自分や相手やみんなにとってどんなよさがあるか」という価値を高める発問をすると、「自分にとっては、今まで以上に悩みを相談できるし、もっと仲よくなれそう」「相手も自分に本音が言えると思う」「みんなで助け合えるクラスになりそう」など、友情、信頼について学んだ心のよさを実感する記述が多かった。

(3) 成果と課題（成果○）（課題●）

- 道徳的価値に対する自分の考えに疑問を抱く活動については、行動ではなく友情、信頼に関する心情を比較することで、児童は自分の考えでは説明しきれないことに気づき、疑問を抱くことができた。
- 議論を通してよき心に迫る活動では、「なんか違う」と考え始めることができる発問をしたことで、多くの児童は友情、信頼に対する考えのよりどころとなるよき心について、迫ることができた。
- 議論を通して見つけたよき心を自覚し、そのよさを実感する活動では、自分に合った方法で表現することで誰もが、友情、信頼についての考えを自覚することができた。また、価値を高める発問によって、自分が学んだ心を一人一人の考えとして終わらせるのではなく、自分や他者、集団との関わりの中で捉え直すことでそのよさを実感することができた。
- 議論を通してよき心に迫る活動においては、「だまっていってもよいのではないかな？」という発問が、児童によっては、既に考えた内容を再認識するだけになっていた。

5 研究のまとめ

まず、道徳的価値に対する自分の考えに疑問を抱く。次に、議論を通してよき心に迫る。最後に、議論を通して見つけたよき心を自覚し、そのよさを実感する。このような授業を積み重ねることで、他者の考えを受け止めようとする児童が育ってきたと考える。

一方で、第2実践の課題として見えてきた「登場人物とは異なる行動を提示し、登場人物の行動を問い直す発問」については、児童がどの段階でよき心に迫ることができているか見とることが必要だと考えた。今後は、「登場人物とは異なる行動を提示し、登場人物の行動を問い直す発問」を機械的に入れるのではなく、児童の思考の状況を見とりながら、よき心に気付いている児童の考えを広げるのか、よき心に迫る発問をしていくのか判断できるようにしていきたい。